

イヌワシの営巣地を発見 鳥海山南麓スキー場開発問題

自然保護委員会



大空を飛翔するイヌワシの雄姿

鳥海山南麓で大規模なスキー場の開発計画が持ち上がったのは、一九八六年のことであった。一九九〇年九月の三島での自然保護全国集会で、このことを知った我々は早速現地調査をして、この計画が気象条件一つを考えてもいかに無理があり、あとには豊かな鳥海山の自然破壊が残るのみと考え、計画者の八幡町長に「開発方法の変更を求める要望書」を提出して再考を求めた（「山」第五五一号参照）。しかし、町当局はその姿勢を変えず、また、地元の自然保護団体と町当局との話し合いも感情的なもつれもあって平行線をたどり、解決の糸口がつかめないままに数年が過ぎた。

地元山形支部の自然保護委員・佐藤淳志会員はかねてからこのことを憂え、開発反対の議論の前に山岳人として、必要な基礎的な学術調査として、イヌワシの生息調査を取り上げたいと考えていた。一九九三年の尾瀬での全国集会においてのこの議論のさい、自然保護活動の実践の一つとして、イヌワシの調査を取り上げてはどうかと提案したのである。

この案が採択されるや、早速地元で調査班を組織して調査に取りかかり、二年六か月後の本年四月、これまでにいとされてきた鳥海山南麓にイヌワシの営巣地を発見した。

詳細は別掲の佐藤会員の報告を見ていただきたいが、この発見が契機となって、前記の開発問題が大きな転機を迎えている。すでに、「イヌワシの巣はない」とした不十分な調査の環境アセスメントに基づいて、「開発は妥当」の判断を下した県の自然環境保全審議会の結論を受けて、県知事は「開発の許可」を出したばかりのことである。



1995 年 (平成 7 年)
8 月号 (No.603)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

鳥海山南麓スキー場開発問題……	1
幻とされたイヌワシを追って……	2
マカルー登山隊・報告会……	3
マカルー登頂の報を聞いて……	4
追悼・永尾和夫君を偲ぶ……	5
辰沼廣吉さんを語る会……	5
報告	
古き道を尋ねて……	6
第15回登山医学シンポジウム……	6
第37回有志閑談会……	6
ジャック93会・春の登山集会……	7
支部だより……	8
秋田支部 宮崎支部	
海外の山……	9
東西南北	
厳冬の山伏岳から八紘嶺還走……	10
田部重治氏の書簡から……	10
短歌・尾瀬……	11
中倉家でみつかったウ師の写真ー 英国にもあった!!……	11
図書紹介……	12
書籍受入報告……	13
新入会員・住所変更……	14
90周年記念フォーラムの計画……	15
会務報告……	16
自然保護随想……	17
INFORMATION……	18
創立90周年記念事業募金応募状況	19
ルーム日記……	19

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日 10~20時
水・金曜日 13~20時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日 13~20時

あったが、日本山岳会自然保護委員もメンバーに加えた「検討会」を組織し、この開発問題を皆で考えようとしている。このように、山岳人であってこそ

できる基礎的な調査を辛抱強く行うことが、山岳会の自然保護活動のあり方の一つではないであろうか。

(澤井政信)

鳥海山南麓に 幻とされたイヌワシを追って

山形支部・佐藤淳志

一九九三年九月の尾瀬での自然保護全国集会で「鳥海山南麓のイヌワシの調査」が採択されると、私は早速現地で調査班を組織して、以来二回の厳冬期を含む延べ二年六か月の調査の結果、この四月にこれまでないとされた鳥海山南麓に、ついにイヌワシの営巣地を発見するに至った。

猛禽類の専門家ではない私が、私なりに工夫したことは、まず田圃に出て徹底的にトビの姿を観察することであつた。これさえしつかりできれば、残る大型鳥類はイヌワシとクマタカくらいであり、後にこのことがイヌワシの個体の識別にも大いに役立ったのである。

驚いたことに調査を始めた翌日、十月十四日に偶然にも四羽のイヌワシの同時飛翔を見た。後にこれは成鳥ペア、今年巣立った幼鳥、それと前年に巣立った亜成鳥と判明した。やがて冬を

迎え、十二月三十日には亜成鳥が、そして翌年一月十四日には幼鳥も、親鳥の激しい追い出しを受けて姿を消した。これらの行動はそれがイヌワシの種の保存のためとはいえ、過酷なものであつた。やがて求愛行動があつて、一月二十九日以降四月六日まで雌の飛翔は確認されなかった。

このように気象条件の許す限り山に入って観察を続けていたが、雪の深い二月四日、アクシデントが起きた。標高六八〇メートルの観測地点で雪庇雪崩がおき、わたしを乗せて崩れ去つたのである。幸い、二〇メートルほどで止まったが、一緒にいた愛犬チュチの姿が見えなくなり、あきらめかけたとき、ノコノコと上がってきて安堵した。この雪崩遭遇でしばらくは放心状態となり、調査をやめようと何度か悲観的にさへなった。

冬の調査は本当に厳しい。登山と異



要塞のような崖の棚に作られたイヌワシの巣

なり、一日中同じところで風と寒さに耐え、じっと待たねばならない。運よく観察できても、それはほんの数秒、数分であり、その瞬間を見逃さないための集中力が必要となる。六月には幼鳥が巣立つものと期待していたのも空しく、五月末には冬に追い出された幼鳥が戻ってきて、この年の繁殖は失敗したことが明白となった。

我々は定点で観測した飛翔トレースを重ねて営巣地を推定する方式を取ってきた。この年の十二月十三日、推定した営巣地に近づこうと通称屏風岩の上部を通過、安全地帯に入つたと判断して固定ザイルをはずした瞬間、またしても雪崩に乗ってしまった。数分の放心状態から覚めたとき、顔を埋めた

雪が真っ赤になっていた。むきだしだした岩肌には打ちつけたのである。何とか気を取り直して車に戻り、医者のもとに駆け込んだ。

明けて一九九五年、旋回上昇地点、高頻度飛翔領域、狩場などについて前年の繁殖行動時とほぼ同じデータが得られ、繁殖行動が期待された。四月八日、驚いたことに一九九三年に巣立った亜成鳥が舞い戻ってきた。このことは今年も繁殖に失敗したのかと落胆しかけたが、直ちにペアのディスプレイを受けて追い出されたのを見て、逆に繁殖成功の期待を高めることにもなった。

四月十五日午後四時、二時間も止まり木にいるイヌワシを発見、夕刻暗くなるまでレンズに収めた。翌十六日、観察地点を近くに移動して、何度も止まり木や周辺を飛翔しているのを確認。十七日、さらに別の角度から観察して狩場からウサギを運ぶ姿や止まり木を確認し、営巣地であることをほぼ断定。四月二十二日の調査で、ついに営巣地であることを確認した。

そこは沢がS字状になった右岸最奥部、南東に面した高さ八〇メートルの垂直崖壁で、中間で三段に区切られた安山岩のオーバーハングの下に豪雪や強風を避け、まさに要塞と呼ぶにふさわしい場所であつた。巣の直径は

約三メートル、高さ一・五メートル、巢材はブナやツタで覆われ、産座の中にヒナがしゃがんでおり、そばに血のついた生々しいウサギが無造作におかれ、小枝にはちぎられた白い毛が付着してフワフワ風に揺れ、巢の両端の岩場には白い糞の跡が残し、その規模と異様な光景に驚いた。

この時期であるので、イヌワシへの影響を考えてほんの数分で引き返し、興奮や感激に浸ったのは、ずっと後のことである。

この瞬間に到達するまで一昨年十月の調査開始以来、登山中の観察日を除いて実に百二十七日を費やしたことになる。三月二十八日に開かれた山形県環境保全審議会がこのスキー場開発に事実上のゴーサインを出してから二十五日目の、開発予定地からわずか一・四キロメートル範囲以内での営巣地の発見であった。

とくにイヌワシ調査で重要なのは繁殖期間の冬季である。「山岳人」としての自然保護の立場であればこそ、厳冬の山岳地帯で調査できたものと思う。まもなく天使が舞うように幼鳥が飛ぶ。長年通い慣れた山も、全く別の視野で見えるから不思議であり、しばらく離れるとまた、愛しい人にでも会いに行くようにイヌワシを訪ねるのがまた不思議な心境である。

マカルー登山隊一九九五・報告会 創立九十周年に花を添え盛大に開催

日本山岳会マカルー登山隊一九九五のマカルー峰登頂祝賀会が、六月三十日東京・池袋のホテルメトロポリタンにおいて、関係官庁、報道機関、協力企業など招待者約百名、本会会員約百名など二百余名が参加して盛大に開催された。

最初に、主催者として村木潤次郎日本山岳会会長が挨拶し、後援いただいた



挨拶する重慶隊長と隊員たち

た文部省、外務省、読売新聞社に謝意を表するとともに、登山の成功を祝し、隊員たちの労をねぎらった。

次いで、文部省体育局長小林敬治(競技スポーツ課坂本議次氏代読)、読売新聞社運動部長島田公博両氏が来賓祝辞を述べ、それぞれマカルー峰の中国側からの初登頂は隊員のチームワークのたまものであり、日本山岳会の創立九十周年に花を添えるもので、心から喜びたいとの言葉を寄せられた。

登山の成功を祝して鏡割りに移り、中国大使館文化部書記官石軍、中国登山協会行政部長張江援、ネパール・パルテンバシエルパ、スポーツ振興基金崎山英博、日本気象協会奥山巖、登山隊総隊長藤平正夫の五氏により銘酒「一ノ蔵」の樽が開けられ、日本山岳協会坂口三郎会長の音頭で乾杯。宴半ばで重慶恒夫登山隊長から登山隊員、報道隊員および中国登山協会の張江援、羅申、趙建軍の三氏、ネパー

ルサーダーのパルテンバシエルパ氏が紹介された。引き続き、スライドにより困難を極めたマカルー東稜登山の一端が紹介され、隊員らの敢闘を称えて参加者から熱い拍手が贈られた。

祝賀会は、藤平総隊長が「かつて西堀栄三郎元会長が、人間の成長は直線的なものではなく、段階的なステップを経るものだ」と述べられたが、今回の登山を通じて隊員が成長したことが何よりだ」と述べ、各方面からの支援に謝辞を呈して閉会した。(南川金一)



次代に残そう美しい山と溪

マカルー登頂の報を聞いて

——若い隊員の飛躍を確信——

山田二郎

日本山岳会の創立九十周年記念マカルー登山隊は五月二十一日に四名、ついで二十二日にはさらに四名の隊員が、苦闘の末に無事登頂を果たしたことが報ぜられた。

この登山は私が会長としての任期中、一九九二年のナムチャバルワ遠征の帰路、重廣隊長によって中国側に申請されたものであった。

当時、日本山岳会の海外遠征は重廣氏に代表される年代層と、今回の遠征の中核となった年代層との間に海外登山要員の不足が指摘され、このギャップの解消が関係者の間に大きな問題意識として存在していた。

このような背景の中で行われるマカルー登山は、何時までも老練な経験者層に頼るのではなく、若手自らが企画、実施する遠征を行って、自らが経験を積み上げるような計画とすべきであろう、というのが私の見方であった。

このような思いで会長職を退き、しばらくして藤平会長から示されたマカルー東稜からの登山は、重廣氏を隊長として企画されるものとしたい、ということであった。私は前述の考えを申

し述べ、藤平会長とはいくどか話し合いを持った。そのやり取りの中で私は「この遠征の趣旨が若手クライマーの養成にあるなら、たとえ頂上まで達しなくとも、自らが計画し実行してこそ、その経験が実体として身につくのではなからうか」と再度申し上げた。

藤平会長のご意見は「山田さんの言わんとすることは解るが、この遠征は頂上に立つことを主眼としたもの」としたい。それはこの登山が日本山岳会創立九十周年の行事だからです」ということだった。

ナムチャバルワが終わった時点では、創立九十周年行事は、現実の問題としては意識されていなかった。だが、その後の経過の中でマカルー登山が九十周年記念行事として位置付けられてしまった以上「登頂」に重点が移るのも止むなしと考え、私の登頂不要論は撤回した。また、登頂第一となれば重廣隊長に優る適任者はいないことは明白で、隊の人員構成をめぐる議論は決着をみた。

このたびの登山を振り返っての感慨は、会報六〇一号所載の重廣隊長のコ

メントにすべてが言いつくされていると思う。

多雪に悩まされた苦難のBC入り、東稜下半部での雪崩の危険と困難なルート工作（その写真を見て筆者は少年の頃に見たカンチエンジュンガ北東稜でのパウアー隊の報告書に載った悪場の写真を思い出した。先日の祝賀会の席上、田辺治君の話では、まさにカンチの北東稜とそっくりで、マカルーのそれはさらに一層手強いものであった、とのことであつた）、上半部の岩稜では時間切れのため、北側の迂回ルートに切り替えて登頂を達成したことなど、重廣隊長にとっては胃の痛くなるような、ギリギリの緊張と苦悩の決断のもたらした成果であつたといえよう。

「登頂」で九十周年に花を添え、数々の思わぬ困難の克服を通じて山本登攀隊長をはじめ若手隊員は数多くの貴重な経験を積み重ねたことだろう。藤平会長、筆者それぞれの思いは隊員各位の忍耐と努力で見事に達成されたことになる。

武田信玄はその遺訓の中で次のように述べている。

「凡そ軍勝五分を以て上と為し、七分を中と為し、十分を以て下と為す。

この故は、五分は励を生じ、七分は怠を生じ、十分は驕を生ずるが故。

味の技、心でつくる



むさし坊 日比谷店
(東宝ツインタワービル9F)
千代田区有楽町1-5-2 ☎03-3504-1905
むさし坊 麹町店
(有楽町線麹町駅東口)
千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313
むさし坊 神田西口店
(神田西口通り商店街)
千代田区内神田2-9-9 ☎03-3252-5015
友膳ゆうぜん
(半蔵門線半蔵門駅3分)
千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891

むさし坊 番町店 (日本TV通り五番町交差点角)
千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

例えば戦に充分の勝を得るとも、驕を生ずれば次には必ず敗るものなり。すべて戦に限らず世の中の事、此の心が肝要なり！
マカルーの東稜を稜線通しで頂上へ、という当初のプランは残念ながら一〇〇パーセントの達成はできなかった。だが、「励を生じ」たことは異論のないところであろう。
私は若い隊員諸君がこの遠征の貴重な経験をベースとして、一段と飛躍されることを確信して、これからも続くであろう日本山岳会の海外登山の将来に、限りなく明るい希望を抱いている。

追悼 永尾和夫君を偲ぶ



長田正行

防衛大学校山岳会の盟友であり、同期生でもある永尾和夫君が突然天国に召されてしまった。

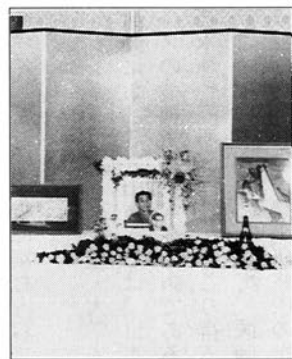
去る二月十九日、先輩と二人で武尊山へスキーツアーに出かけ、前武尊・剣ヶ峰間のコルへ出、剣ヶ峰東側の斜面をトラバース中、雪崩に遭遇したのである。剣ヶ峰東側の斜面は、南と北側がアオモリトドマツで覆われ、コル付近から下部にわたっては二抱えくらいもありそうなブナやダケカンパが一〇〜一五メートルおきに生えている落葉樹林帯で、雪崩が起これば思われる場所であった。土地の人の話でも今まで雪崩が出たとは聞いたことがないという。ただ、平成三年の台風一九号により、剣ヶ峰の上部が倒木などで崩れたため、状況が変わってしまったのではないかとことである。

二人は何となく嫌な感じがしたので、間隔を取って行くことにし、彼が斜面監視をしていたのであるが、その彼が雪崩に巻き込まれてしまったのである。経験豊富でかつ慎重な彼でさえ、自然の力の大きさには判断を超えるものがあつたのであろうか。返す返すも残念でならない。山仲間たちの必死の捜索により、五月九日、雪中から事故当時のままの姿で発見され、ようやくご家族のもとへ帰ることができた。

永尾君は、開成学園の中学時代から山岳部活動を始め、防大山岳部、自衛隊山岳会など、一貫して山を友としてきた。山や山の生活に関する知識は豊富で、かつまた、仲間に対する気配りや面倒見のよさは抜群で、防大山岳部随一の歴史に残る名マネージャーでもあつた。

しかし君は、航空自衛隊の組織からも囑望され、山ばかりにのめり込む暇はなかった。現役時代の本格的山行は、シックルムーン峰登山隊の副隊長として参加しただけにとどまった。

定年退官後は、それまで温めていた山への思いが一気に放出し、堰を切ったように山登りやスキーを再開した。日本山岳会スキー懇親会への参加、防大山岳部の現役指導、さらに、開成山岳部OB会、防大山岳会、自衛隊山岳会など古い山仲間をまとめ、迂遠がちななっていたクラブ活動の復活と旧交



辰沼さんがよく描かれた遺作の水墨画とともに飾られた遺影

辰沼廣吉さんを語る会

田邊 壽

を温める機会を次々と計画、実行していった。嬉々とした語らいからは、君がいかに人との繋がりがや友情を大切にできたかが分かった。親睦の輪がさらに広がり、花開く矢先の事故であつた。

公私にわたり、常に組織のため、グループのため、人のために走り続けた君であつた。君の意思は、はからずもこの事故を契機として、それぞれの山仲間を受け継がれつつある。

どうか安らかにやすみください。

辰沼廣吉さんが逝かれて早くも三か月余が過ぎたが、去る五月二十七日市ヶ谷の私学会館で「辰沼廣吉さんを語る会」が開催された。発起人は日本山岳会登高会の酒井捷之助、山田二郎、村木潤次郎、松田雄一、宮下秀樹、田

邊壽の各位で、当日は辰沼家から辰沼寿恵様、進様が出席された。参会されたのは辰沼家の方々のほか、織内信彦、堀田弥一、今西壽雄の各氏をはじめ日本山岳会の方々、登高会、慶応義塾大学医学部三四会山岳部関係者などの百十余名の多きにのぼつた。

会場には、辰沼さんのなつかしい写真を挟んで、水墨画をよく描かれた辰沼さんの遺作が三点掲げられ、遺影の前に飾られた白い花とともに辰沼さんを偲んでいた。

会は田邊の司会により、発起人を代表して故人の古い友人である登高会の酒井捷之助さんから挨拶をいただき、続いて辰沼さんと親交厚く高所医学でも先生と関係の深かった住吉仙也さん、さらに医学界での業績を偲んで慶応三代会員で現在慶応医学部の細田学部長よりご挨拶をいただいた。次いで今西壽雄会員の音頭で献杯、しばらく歓談の後、大森薫雄、村木潤次郎、松田雄一、大塚博美、河野之保、太田敬氏らが辰沼さんを偲んでスピーチを行った。

最後に、辰沼家を代表して辰沼進様が挨拶され、辰沼さんを偲びつつ、この会を終了した。

この会の開催にあたり、会員の皆様の温かいご協力を心より御礼申し上げます。

報告

REPORT

古き道を尋ねて

笹子峠越え・五月二十七日

図書委員会

笹子の駅を出て国道二〇号線をたどり、新田から旧道に入ると、車の騒音も消えて、そこはもう静寂の支配する山河森樹の世界である。木の芽の萌え出ずる音を聞きながら風薫る皐月の山路を歩けば、これ見よがしに大葉を広げる朴の木、絡み付く藤蔦、櫨の木など幾種もの樹木が、青葉のトンネルを作っていて、蝶々が舞って熊ん蜂が挨拶に来る。

傍らにひっそりとたたずむ、明治天皇御野点跡碑を見ながら、矢立の杉へ木々の頭上をその巨枝で覆い、千秋の時を刻んで旅人を見つめてきた老杉、矢立の杉。その傍らに小さな四阿があり、一行八名のみのお昼の宴となる。あくまでも冷たいビール、程よく冷えたワインとともに、湧き出ずる緑樹に囲まれた中での食事は、食前方丈にも勝る満足を与えてくれた。

食後は笹子峠のトンネルを跨いで甲斐大和へ。下りの道端に立つ桜の樹に

番号が打ってあった。四五七番まで数えたところで協道にそれ、初鹿野改め甲斐大和の駅へ。六時間足らずの楽しい散策でありました。(飯田 進)

第十五回登山医学シンポジウム

多角的な演題と活発な討論

医療委員会・堀井昌子

去る六月九、十日、神奈川県葉山の湘南国際センターにおいて、第十五回日本登山医学シンポジウムが開催された。この学術集会は日本登山医学研究会が主催するもので、本医療委員会は協賛する立場であるが、今回は約二百二十名の参加のもと、三十二題の一般演題、要望演題(低体温症)をはじめ、シンポジウム、パネルディスカッション、特別講演、教育講演の各一題、そして招請講演二題の発表と活発な討論が行われた。

特別講演(原眞氏)、招請講演

(Prof. John Sutton, Dr. Yevgeniy Gippeneier)の三演者は偶然にも、低圧、低酸素条件下の医学的なことをテーマとされ、それぞれに大変理解し

やすく、また、示唆に富む内容であった。

シンポジウム「高校生・大学生の部活動における高山病」では、日本アルプスの稜線で重篤な高山病である高所肺水腫や高所脳浮腫が起こり得ること、起こっていることについて、医師、クラブの顧問教諭、登山研修所の指導者から発表があり、また参加者との討論も活発に行われ、主催者の意図するところは十分に伝わったものと確信している。

パネルディスカッション「女性と高山登山」のパネリストにより、生理面や心理面での女性の特徴、あるいは登山に性差はあるのかといった議論もされ、有意義なパネルディスカッションであったという声が多かった。

教育講演「凍傷の治療」は本医療委員会の委員である長尾悌夫氏からいただいたが、「予防に勝る治療なし」「身体髪膚これを父母に受く、あえて毀傷せざるは孝の始なり」という氏の教訓を、聴衆が真摯に受け止めて欲しいと感じた内容であった。

*

以上が第十五回日本登山医学シンポジウムの報告ですが、「日本登山医学研究会」は会員三百二十名中、約三割が医師以外の登山愛好家であり、その比率は年一回のこのシンポジウムでは

二分の一となります。登山の医学に興味のある医師ならびに医療従事者、登山愛好家の方々の入会を歓迎します。

第三十七回有志閑談会

小石川後樂園

涵徳亭で三十五人が清談

長老・中堅の会員有志が語り合う、恒例の有志閑談会が、六月十七日午後一時から、小石川後樂園・涵徳亭で開かれた。今年は三十七回を迎え、世話役(高田眞哉さん、武田満子さん)の勧誘よろしきを得て三十五人が出席、二時間以上にわたる楽しい清談会となった。

宴は熱海から来席した九十歳の青木昇さんの乾杯で始まり、自由歓談の後武田満子さんの指名により、長老五人のお話があった。要旨は次のとおり。

●織内信彦さんのお話

今年は戦後五十年、山岳会と戦争の関わりについては、いろいろなことがあると思うが、その中で昭和十八年の学徒動員についての思い出、会報(二八号)に載っている話です。

理事会で山岳会として大学山岳部の出征者を送る壮行会を開くことになった、兼松学さんと私が世話役となり産組中央会館で開いた。病氣の木暮会長に代わって、横副会長が壮行の辞を述

べ、学生代表は早稲田の近藤等さんが答辞を述べている。

楨さんの辞は長いものだが、その中で有名な道元禪師の言葉「不惜身命、但惜身命」を使っておられる。これは貴乃花が昨年、横綱に推されたときの挨拶でも使っている。命を大切にという意が込められているように思えるが、答えられた近藤さんも気負うことなく「我々は既に今日あるを期していた。(中略)皆さんもその時のためにヒマラヤの研究と準備を忘れないでいただきたい」と淡々と述べられた。

会報の筆者は田辺主計さん、抑制の効いた名文で「学生諸君も戦闘の小憩に、ふとこの出陣前の静かな一夕を思い出すのではないかと結んでいる。今日ご出席の方にも、覚えていらっしゃる方もおられると思うが、出席者三百名というのも当時では空前、ともあれ山岳会らしい静かな立派な壮行会であった。

●堀田弥一さんのお話

同じ時期に登っていた年下の人たちが先に死に、去年は家内を亡くし、最近は孤独が身に沁みる。

弥一という長男のように思えるが、八人兄弟の真ん中です。次男だが弥次ではおかしいので、弥一となった。兄弟も亡くなり、甥や姪は大勢いるが話が合わない。しかし山に登ったお陰で、松方さん、楨さん、三田さん、京都の

今西さん、西堀さんなど先輩とお会いし、お話ししたことは幸せだった。

本格的な山登りをやめてから六十年になるが、山の話を聞けば標高差とか技術に興味向き、一緒に登ったような気持ちになる。また昔は、穂高の岩小屋や雪の乗鞍に一人でこもって楽しく登ったこともある。その単独行と同じで、今は孤独を楽しんでいる。

●金山淳二さんのお話

閑談会が始まった頃は、六義園とか椿山荘とか立派な会場で、私のような田舎者が出るところではないと敬遠していたが、先頃亡くなった河野幾雄さんに誘われて出るようになった。そうしたら同じような田舎者もいるし、若い友人も大勢できて喜んでいる。

堀田さんとは、私が五か月遅れの八十六歳です。一緒に頑張りましょう。

●木下是雄さんのお話

私の住んでいる茅ヶ崎から年に何回か天城の山が見えます。もう一度、万二郎、万三郎に登りたいと思いついて、七十八歳になりますので、日の長い梅雨の晴れ間を利用して、一昨日、昨日とようやく登ってきました。ところが万三郎の下りで、木柵から突き出た長いボルトに引っ掛かりまして、皮膚がペロリと剥けました。

下りてから皮膚を縫ってもらい、破傷風の注射を打ってもらいましたが、

今日はお酒を飲んではいけません、と言われ、せっかくの美味いビールが飲めない始末で、残念なことです。

お話のあった鳥海山のスキーですが、最初は一九三九年に、黒田夫妻と吹浦の畠中さんの小屋でお世話になったが、吹雪で登れなかった。今年は秋田大学の人がスキーを担ぎあげてくれる、という甘言に乗せられたお陰で、頂上を踏むことができ、また家内と二人で北側の雪のたっぷりある矢島口へ無事に滑り下りてきました。何年かかかって頂上を踏んだことはいくつかありますが、五十六年ぶりの頂上は初めてで、私にとってはよい山登りでした。

●渡辺兵力さんのお話

私は戦争中、中国におりまして直接関係した話ではありませんが、山岳会と戦争の関わりについてお話しします。

私の学校の先輩に加藤誠平という方が、山ではカッチョと呼んでおりましたが、戦争中に理事をしておりまして、陸軍から「山岳会に、岩登りの技術指導をしてくれ」と頼まれた。ところが山岳会は頑として当時の陸軍の要請をはねつけたので、戦時中は山岳会は睨まれた団体だったらしいということです。

聞いた話で、一部間違っているかもしれませんが、山岳会として一本筋の通った話とと思いましたので、ご披露しました。

三時半、会食を終わって後楽園の菖蒲をめながら散会した。(関塚貞亨)

春の登山集

倉岳山・高畑山(清掃登山)

ジャック93会

ジャック93会の春の登山集会が去る四月十六日、中央線沿線の倉岳山と高畑山を中心に行われました。

当日はそぼ降る雨にもかかわらず、会員十七名とゲスト二名の十九名で梁川駅を出発しました。

今回の企画は『自然と人に優しい登山』と銘打って清掃登山を試みました。三々五々、最初の集合場所である倉岳山へ向かいました。沢沿いの道ではほとんど他のパーティーに会うこともなく、静かな山歩きが楽しめました。立野峠からは稜線歩きとなり、急登で一汗かくと小広い倉岳山の頂上へ着きました。ここで大休止のあと、さらに穴路峠から高畑山を経て、予定通り鳥沢へ下山しました。

あいにくの雨も昼頃には止み、下山路では滑る足元に苦労したものの満開の桜も見物でき、楽しい一日を過ごしました。満杯になったゴミ袋とともに全員無事に帰宅しました。(大場悠平)

JAC
支部だより

全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

秋田支部

四月の支部総会報告

平成七年度の秋田支部総会は、去る四月十六日正午から、秋田市の「ニューたけや」において開催された。

鈴木常務委員の開会の言葉に始まり、出席会員二十三名、ならびに委任会員十七名を確認。岡田支部長より各事業の実施や友好登山、会費納入の好調なことなどが述べられ、引き続き支部長を議長に指名して議事は進行された。主たる内容は次のとおり

・平成六年度の事業、決算、監査報告
・平成七年度の事業計画

総会、役員会の開催、会報二・三回発行、山行（北林他県内三山、海外、隣国の山）の実施

・平成七年度の予算（十九万四千円）
・役員改選

支部長、副支部長は留任、委員一名を増員し八名（新任三名、退任二名）その他、九十周年記念事業への参加など

総会終了後、平吉会員の乾杯の音頭で懇親会を開催、四方山話を肴に早春のひとときを楽しく過ごした。

（佐々木民秀）

宮崎支部

諸塚山開き

―十回の節目に思う―

■ふるさと再発見

年ごとにまみゆ楽しさ八重平の

里の人らと紅白の梅

黄砂混じりの春の雪が、山の斜面から吹き上がってくる強風にあおられてほほを激しくたたく。標高一〇〇〇メートル。フォレストピア六峰街道沿いにある飯干緑地広場の縁に、二メートル間隔に穴を掘り、サクラの苗木五十本を植え込む。平成七年三月十二日、第十回諸塚山開きを記念し、諸塚村花であるサクラを選んでの日本山岳会宮崎支部寄贈の植樹である。

思えば十一年前、宮崎支部誕生と同時に三つの目標を立てた。

①宮崎ウエストン祭開催 ②宮崎百山

選定登山と宮崎百山小冊子刊行 ③諸塚山（一三四一・六メートル）山開き（第三回朝日森林文化賞受賞記念と宮崎支部宮崎百山選定記念）である。

宮崎支部は「ディスカバーふるさと」を合い言葉に、登山活動のメインをこの三つの目標に向けて終始した。

■ウッドピア諸塚

女人を禁制したる山という

姫沙羅多き諸塚の山

諸塚村は、面積一八七・五九平方キロメートル。ほとんどが山地で、人口二千七百三十一人（平成七年六月一日現在）の山村である。過疎化の進むなかで、村民一人ひとりが「森林理想郷」の実現にかける情熱に燃えている。

平成二年に、諸塚村国土保全森林作業隊を発隊させ、自然保護と森林づくりに取り組む姿勢と実践は他の追従を許さない。山村に生きる人たちの宿命とはいえ、人並の努力と掛け声だけでは、森林文化賞の受賞はなかったことだろう。今回のサクラの記念植樹は、村人たちの自然愛護へのひたむきなまへの感動と、山開きごとに大勢の支部員が八重平公民館に宿泊しながら、地域の人たちとの交流のなかで味わう「人情の美しさ」にほだされた側面も大きい。

■あな千八百人の参加

過疎のこと嫁ぎなきこと村人の

熱き語りに言葉うしなう
夜神楽の太鼓ひびける八重平

山のこだまにこころ洗わる

昭和六十一年三月二十三日、諸塚山は朝から雪が降り出した。試行錯誤のなか、第一回目の諸塚山開きである。

村外から九十五人、村民を含めて二百二十七人の参加だった。「日本一早い山開き」と銘打ったイベントは、自然の美しさといえ、回を重ねるごとに参加者は増え続けた。昨年は千三百人、今回は予想だになかった千八百人もの参加で大にぎわいだった。

地方の時代といわれて久しい。だが、もはや形骸化したのだろうか。過疎が続く地域の活性化に少しでも役立とう。山麓に、登山による人害をもたらしてはならない。山里の人たちに山を守ってくださる感謝と交流を深めつつ、山登りの賛同と理解を深めたい……。このようなことは、素朴で気負いのない一登山者として、また「ディスカバーふるさと」への出発点であり、原点とはいえないだろうか。

■諸塚村から感謝状

細枝に群がり咲ける稜線の

紅のぼんぼりアケボノツツジ

「人は、自然を傷つけながら生きていく。そのことを思いながら山に登ってほしい……」甲斐重勝諸塚村村長は、第十回山開きの前夜祭歓迎挨拶の最後

をこう結んだ。印象的であり、しみじみと考えさせられた。

この後、思いもしなかった感謝状と記念品が宮崎支部に贈呈された。「第一回山開き以来積極的に努力支援され今日の隆盛に導くとともに地域活性化の促進に尽力された功績は誠に顕著であります……」。素直にお受けしたものの、むしろ感謝状は私たちから村人に贈るべきなのではないのか。このことに気づいて、私たちは襟を正した。

婦人部の人たちの、しいたけをメインにした手作りのメニューに地酒のふるまい。中央公民館に集う二百人もの宴の費用はすべて村の負担だった。せめてものお返しにと思い、宮崎支部員一同がこぞってエーデルワイスの歌を元氣いっぱいステージで歌った。

森の桃源郷を目指す諸塚の自然の美しさに加え、村人たちの人情の美しさに触れての十年だった。年ごとの再会で高千穂町のウエストン祭、諸塚村の諸塚山開きで出会った地域の人たちとの交流の絆は、記念樹のサクラの生長に負けない大きなものになっていくことだろう。十年、二十年先に、サクラの樹を囲み、花を愛でながら、森林理想郷を語り合う夢が、今膨らむ。

熊さざの語りに似たり溶け落ちる

諸塚山の春樹木

(大谷 優)

海外の山

チベット人のヒマラヤ

江本嘉伸

「攀登世界十四座高峰集資方案」というパンフレットがある。チベット登山協会が作成したものだ。

一九九三年から二〇〇〇年までの間に八〇〇〇メートル峰全山をチベットの登山家だけで登ろうという計画については、ご存じの方も多いと思う。これはその資金援助の呼びかけなのだ。

すでにアンナプルナはじめ四座に登り、目下ガッシャブルムをめざしているが、財政は苦しい。

パンフレットには「五千ドルから五万ドルを寄付した人は、チベットの新聞や放送、テレビで宣伝する」「五万ドルから八万ドルをサポートした人はチベットが開放しているどの山にも五〜八人のメンバーで登ることが出来る」など、具体的な条件と銀行口座が書かれている。

チベット人がヒマラヤの八〇〇〇メートル峰をすべて登ってしまおう、と発想し、海外に資金援助を頼むところに時代の移り変わりを感じる。

一九二一年から一九三八年にかけて、七次にわたってイギリスの登山家たちが、チベット側からチョモランマに挑戦したことは、ヒマラヤ登山史のなかで大きな出来事として刻まれている。二四年の第三次登山で、アーヴィンとともに第一ステップ付近で消えたジョージ・マロリーという登山家の存在が、そのことを一層ロマンチックにした。しかし、この登山に対するチベット人たちの否定的な反応、第四次の三三年まで、九年も立ち入りを許さなかった理由については言及されることが少ない。

エベレスト登頂計画がイギリスの地学協会とアルパイン・クラブの間で具体化したのは、第一次世界大戦の終わった一九二〇年四月の遠征委員会だった。まず、チベット政府からの許可取得が必要だった。当時、

シッキムに政務官として駐在し、ダライ・ラマ十三世の信望厚かったチャールズ・ベルがその任にあたったが、ベル自身ははじめは「たとえ、好意から許可が出たとしても、チベット人にとっては、雪をつけた山々は畏敬の対象であり、また、チベットの土地にはそれぞれの魂が宿っている、それを知らず、仏教について理解を持たない外国人の入域は歓迎されないだろう」(“Portrait of a Dalai Lama”)と考えていた。

結局、ラサでの法王との会見の結果、イギリスの登山家たちはエベレストに登る許可を得た。しかし、ベルの案じた通り、問題が起きた。「偵察隊のメンバーが国境でトルコ玉やルビーを掘って持ち去った」との報告が地方の役人からチベット政府に入ったのだ。

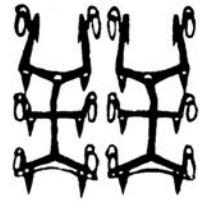
シッキムの政務官は、ベルから、

ヤル・ツアンポーの探検で知られる探検家、F・M・ベイリーに引き継がれたが、ベイリーは以後、エベレスト問題に悩むことになる。そのいきさつは、A・スウィンソンの『国境のかなた 大探検家ベイリーの生涯』(白水社刊、松月久左訳)に詳しいが、ベイリーは「チベットのだけれども、遠征を歓迎しないことは明白で、許可はわれわれに対する友情にすぎない」と、チベット人の立場をイギリスのエベレスト委員会に説明、それに対し、委員会は逆にベイリー批判を強めるのである。

チベット人の側からのヒマラヤ史の視点は、たとえば深田久弥の労作「ヒマラヤの高峰」にもない。本当はヨーロッパの登山家の踏襲でないアジア人の「ヒマラヤ史」が必要だ。

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜七枚以内でお願いします)



カット 中村あや

厳冬の山伏岳から八紘嶺還走

杉岡 繁

二月の連休に、南アルプス安部奥の名峰・山伏岳(二〇一四メートル)に登り、大谷嶺を経て、八紘嶺も登頂、梅ヶ島に下山した。中級の山は良し、天候も快晴、山仲間も良く、雄大な展望を眺め、充実した冬山であった。

富士宮市で岳友と合流し、二台の自家用車を出発した。午前十時に西日影沢出合いの登山口を出発。ワサビ畑付近から雪が現れ、嬉しくなる。大石を通り、よもぎ峠で昼食。連休ゆえに午後二時通過の稜線分岐点付近で十数人の下山者に会う。第一日は晴天だが、明日の悪天を考慮して三人で山伏岳に登頂。十五時二十分に市営避難小屋に着いた。夕食は質素だが、うまい。銘

酒を飲む。外に出て山にまつわる歌を大声で歌う。日没後は気温も下がり、零下九度、夜空には月が冴え、星がきれいだ。無人小屋泊まりは七人だった。

翌朝午前六時に、冬山装備の十五キロのザックを背負って出発。積雪は約一メートルだが、固くしまってアイゼンの爪がきく。久しぶりのピッケルを使って、再び山伏岳に登頂した。待望の日の出だ。東は茜色でモルゲンロートの大景観だ。皆「ああ美しい!」と感激した。近くには布引山、笹ヶ岳が手にとるごとく見える。遥かに上河内岳、聖岳、赤石岳、悪沢岳などの荒川三山が真っ白にそびえ、三〇〇メートルの高峰に感動する。

山伏頂上は笹原だが、積雪期は白銀に包まれ、枯れた巨木が幻想的だ。積雪は約八〇センチ、アザミの頭上上がる。また下って大平沢の頭に着く。し

ばし平坦な雪原だ。大谷嶺の登りはやきつい。大谷嶺付近から遠くに白根三山が見えた。右手に富士山が眺められ、歓喜する。二つの山を越えて五色の頭に達す。次の八紘嶺との間にあるコル手前の約六〇度傾斜の岩稜は、危険で細心の注意を要する。右側も左側も急なガレ場で、慎重に通過する。八紘沢の頭を過ぎ、富士見台までは急な下り坂、雪もくさり、アイゼンに雪団子が着く。富士見台を過ぎたところで、アイゼンを脱ぐ。

登高意欲に燃えている中高年。パーテイだが、重装備で慎重に、きめ細かく行動したので、梅ヶ島には十五時三十分にとどろき着いた。限りなく素敵で、快適な冬山還走を糧に、今後も目標と視野を高く、より広範囲に山々を登高しようと希望を抱いて、四十五年続いている登山に感謝し、快哉の気持ちで帰路についていた。

田部重治氏の書簡から

望月達夫

私の手許に残っている葉書三通は、すべて「山岳」の原稿依頼に対する返事である。

○昭和三十四年八月十日消印 杉並区阿佐ヶ谷三丁目五一一番地から武蔵

野市吉祥寺三三七へ

林先生(註Ⅱ並木)に関する原稿を二三日中に御送り致します。次から次と約束の原稿があるので約束の順序により仕事を片付けて行きたいと思っています。林先生のことについて余り澤山の材料がないのが残念です。先生は山よりも海岸の美をより以上に鑑賞していられただちに於て旅行家だったと思います。山と溪谷社に「わが山旅五十年」を十回ほど連載する豫定で、それが忙がしいのです。

(右の田部氏の原稿は「山岳」五四年追悼欄に収録されている)

○昭和四十年五月三十一日消印 杉並区阿佐ヶ谷北二丁目二十一番十五号(町名表示変更)から武蔵野市境一ノ二八〇へ

拝啓 高山市の住君(註Ⅱ広造)のことを知っている者は恐らくないのではないでしょう。時とすると近藤(註Ⅱ茂吉)、三枝(註Ⅱ守博)、中村(註Ⅱ清太郎)、三人の内、誰か知っているかも知れません。知っているといっても一、二度山岳会であった程度ではないでしょうか。 不一

○昭和四十三年四月十日消印 前と同じ住所から境二丁目一九ノ一九(番地表示変更)へ

拝啓、中村君(註Ⅱ清太郎)のことを書けと云うことですが実は私よりも三

枝君(註「守博」)の方が適当ではあるまいかと思ひます。一度あたつて見て下さい。どうしても三枝君がいやなら私が書いてもいいですが、私は今非常に忙がしいのです。八十四歳の老人が学校を三つ(東洋、法政、実践女子大)教えて、その上今年中に二冊の本を出版しなければならぬのです。従つて六月中に書けと云われても恐らく不可能だろふと思ひます。いつでもいいか

尾瀬

短歌

塔田也寿

燧岳水面の風に碎けては

花に残れる郭公の詩^{うた}

郭公の山へ歩めば朝まだき

足の辺白き水芭蕉かな

原の面を狭霧ながれてあさやけの

至仏の山のほのがくれゆく

「アヤメ平」

よぎりゆく雲のまにまに光り出でし

蓬萊の池塘夢と果てしよ

「至仏山頂」

ほの青き森かげの雪ぬけいでて

花にやさしき日だまりの岩

ら書け、場合には今年中にでもと云われるれば書けるかも知れませんが。しかしそれでは御困りと思ひます。よく考えて下さい。

不一

(この葉書は前半は「山岳」六三年二三一頁に掲げたことがあり、またこれによって三枝さんから追悼の一文を頂戴した経緯も述べた。右「山岳」の追悼欄を参照して頂きたい)

中倉家でみつかったウ師の写真 —英国にもあった!!

田畑真一

小野健氏の玉稿「中倉家でみつかったウエストンの写真」(本誌五九九号)を興味深く拝読した。これが貴重な発見であることに異論はない。私は前記の成果にもとづき、さらに関連する考えを発表するものである。

それは同一写真が、英国・王立地学協会にも、久しく眠っていた点についてである。明治二十八年七月ごろ、ウエストンは同協会に対し、日本の人々や風景の写真二十一枚を寄贈した。記録(「New Maps」The Geographical Journal, Vol. 6, No. 2, 1895)が伝えるところであり、島田巽先人をはじめ、川村宏、三井嘉雄、安江安宣の諸氏が紹介する(「W・ウエストン年譜」、

『山岳』第八二年)、これら写真は現在も保存され、その内容が明らかとなつたばかりでなく、複製まで入手という快挙もあった。百年ぶり、ウエストン寄贈写真の里帰りである。これについては、若干の経緯を述べる必要があると思う。

平成四年五月八日、私は三井嘉雄氏(本会会員)とともに、同協会を訪問。新潟県青海町をはじめ、全国各地に散在するウエストン顕彰碑を撮影したキヤビネットカラー写真を贈呈し、来意を告げ、歓迎を受けた。同年四月には英国のウエストン研究家ハミルトン夫人の来日もあり、本会で歓迎会が開かれた。そのおり、私は開発秀三氏(本会会員)に対し、参会のお誘いをしたが、これがきっかけとなり、開発氏は帰国後のハミルトン夫人を通して、同協会とコンタクト。複製の入手へとつながった。

さて、これら写真の中には「Omachi」とキャプションがあり、撮影者として「Phot Rev Weston 1885」とあるものもあった。つまり、「明治二十八年、W・ウエストン師撮影、大町」ということである。しかし、筆跡については、ウエストンとは考えにくく、撮影者が

ウエストンという点にも問題がある。この写真が前記した写真と同一である。発見された中倉英市氏宅以外にも、同一写真が存在するわけである。これは何を意味するのか。ウエストンにとつては、当時宿泊した中倉利忠宅での思い出が忘れ難いものだったこと、それでゆかりの写真を寄贈した。こんな推測ができると思う。いずれにしても、同一写真を寄贈していた点が判明した。

ただ、明治二十八年という点、ウエストンはすでに帰国しており、この点に問題がないともいえない。しかし、これは同協会で書き加えられたものかもしれない。Omachiというキャプションについてもである。はっきり言える点は、キャプションが間違っていたこと。これは当時の村名、小滝(現在の糸魚川市内)であれば、Kotadaとでも表記願いたいところである。

「別記」本稿は安江安宣氏(本会会員)の奨励により、発表するものである。なお、小野健、蛭子健治、開発秀三、小関恒雄、中倉英市、三井嘉雄、峯村隆、吉田龍源の諸氏、王立地学協会の配慮を得た。記して謝意を表します。また、先人のお名前については、敬称略とさせていただきます。

今年もさくらで会いましょう

図書紹介



カット 中村あや

西尾寿一・著

『溪峰閑話』

京都山の会の会長である著者が、同会の会報「青嶺」の巻頭言として掲載した六十八編を一冊にまとめたものである。

世の中には奇妙なことがたくさんあるが、社会の真っ直中で活躍中の人々は、このことに気付かない場合が多い。登山界もその例にもれず、奇妙なことが多々ある。

著者はそうした観点からこの文章を書かれたようで、登山関係のことにも多岐にわたって問題を提起している。目次から例をあげれば、日本百名山のこと、白神山地のこと、現代登山者気質のこと、登山はスポーツか、等々。今や登山も世の中と無関係ではない。現在では完全に社会問題の一部である。著者の提言はそのことにあるようだ。

一九九五年一月 ナカニシヤ出版刊

二二四ページ 千八百円

(茂見 猛)

読売新聞社・編

『ナムチャバルワ初登頂』

偵察から始まって三年、日本・中国合同隊の挑戦は一九九二年、ついに登頂に成功した。これは報道と、この登山隊を後援した読売新聞社が発行した公式報告書である。

初めの約三分の一はカラー写真、残りが登山記録、登山隊員名簿、登山隊長他の手記、報道隊の報告などで、モノクロ写真をふんだんに使ってまとめている。日・中合同隊の報告書らしく日中両国語で書かれている。

ヒマラヤ西端の高峰ナンガパルバットは魔の山といわれたが、東端のナムチャバルワも魔の山であった。

一九九四年十月 読売新聞社刊 一九九ページ

(茂見 猛)

L.D. THOMSON・著

THE BLACK CLOUD

これは、イギリスにおける初期の山岳遭難とその救助における具体的な記事を集めた本である。もちろん当時の記事そのまま紹介したものではない。独特のスタイルの地図をはじめ、遭難

現場付近の風景や救助隊の様子を撮影した写真は、この本以前には発表されていないものだという。

著者のトムソンは、亡くなった祖父が遭難したという、山岳遭難に関するスクラップ記事を紹介する形で、この本をまとめている。

イギリスといえば、ほとんど高い山がないというイメージがある。一九二〇年代後半から、スコットランドのケルンゴルム山付近におきた、著名な三つの遭難も、せいぜい千メートルそこそここの場所で起きた。

本書では、一九二八年から一九六六年までの七つの遭難が扱われているが、その多くは、正月から四、五月にかけての時期に起きたものだ。救助は、気象研究者や医者、それに壮健な体に恵まれたボランティアによって行われている。

著者は、過酷ともいえる冬山の自然の厳しさに対峙する形で、英雄的で自己犠牲的な人間の精神を示したかったのである。まだヘリコプターを中心にし、良く訓練された救助隊が組織される以前の山岳遭難史ともいえるもので、ヒマラヤ登頂が始まる以前の、イギリス山岳界の雰囲気を知る貴重な本ではなからうか。

(山口祐一)

The Ernest Press U.K. 1993, pp274, \$9.99

R.W. Sandford, Geoff Powter・編
CANADIAN SUMMITSSelections from the Canadian
Alpine Journal 1907-1994

カナダ山岳会機関誌の中から登攀記などを抜粋したものに、編者が簡単な注釈を加え、歴史的な流れを解説している。初登頂記事が多い中でとくに目を引くのは、一九四九年刊に「アルバーターの第二登」が取り上げられていることである。

植隊は、一九二五年七月に初登頂しているが、CAJに記録は残っていない。植隊は頂上に残置すべくピッケルを担ぎあげて山頂に残したとされているが、その後二十余年、幾度かの挑戦が退けられているうちに、このピッケルは銀製であるとの伝説にまでなっていた。この隊も悪戦苦闘、いくつかの幻の山頂に惑わされながらも、ついにガスの切れ目にピッケルの頭を望見して意気高揚し、やつのことで頂上にたどり着き、氷雪に埋まったケルンの中の「ピッケル」と、長年月を耐え抜いた「登頂記録」に直面する。

ピッケルは伝説の銀製ではなく、二十三年間の風雪に耐えた錆びついたスイス製標準品であったが、頭部にM・T・Hのインシヤルが金色に輝いていた。そして、このピッケルと登頂記録

はアメリカ山岳会のニューヨーク博物館に寄贈されたという。この記念品をカナダ山岳会またはカナダの博物館に保管したいものと編者は注記している。

一九九四年発行 一八九ページ

(南井英弘)

Berg '95

AlpenvereinJahrbuch

ドイツ・オーストリア・南チロル山岳会『年報』第一一九号。付録地図と巻頭案内六篇はブレンナー峠周辺の山地。ローマ街道の石畳を遺す奥伊国境アルプス越えの故地だけに、歴史の記述が興味深い。以下、アルピニズム・スポーツ登攀・遠征の章に九篇、登山／登山史が五篇、芸術／文化が五篇、自然利用および自然保護の章に四篇、巻末に氷雪登攀用具のヨーロッパ統一企画問題の論文。登攀記録はパゴニア周辺、コカサス、登山史を含めた中央アジア・パミールの山々が中心で、写真も素晴らしい。

だが本号を読んで強く感じるのは、たいいていのはやり尽くした現代登山を反映して、非常に思索的なエッセイが増えていることだ。オーストリア山岳会がホッホアルム山域の開発阻止のため一山買ってしまった話もおもしろかった。

(平井吉夫)

書籍受入報告 (1995年5～6月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入
W・ウェストン (著) 岡村精一 (訳)	日本アルプス：登山と探検(平凡社ライブラリー No.94)	381pp/17cm	平凡社	1995	出版社寄贈
伊佐九三四郎	キリマンジャロの石：辺境の山・旅	237pp/20cm	現代旅行研究所	1995	著者寄贈
田口二郎	東西登山史考(岩波・同時代ライブラリー No.223)	247pp/17cm	岩波書店	1995	出版社寄贈
平野長靖	尾瀬に死す(現代教養文庫 No.1530)	318pp/15cm	社会思想社	1995	近藤緑氏寄贈
小倉董子	これなら安心・山歩き入門	159pp/22cm	主婦と生活社	1995	著者寄贈
尾野益大 (編)	日本人と山：田中澄江さん講演会録(1994. 10. 12 於：徳島)	15pp/27cm	尾野益大(私家版)	1995	編者寄贈
全国キネシオテーピング協会(編)	すぐ効くキネシオテープ療法：テープ使用法 (ビタミン文庫)	216pp/20cm	マキノ出版	1995	編者寄贈
岡崎立	野鳥フィールド日記(MY DATA 図鑑)	239pp/19cm	山と溪谷社	1995	著者寄贈
松岡真澄	野の花フィールド日記(MY DATA 図鑑)	239pp/19cm	山と溪谷社	1995	著者寄贈
志水哲也	果てしなき山稜：襟裳岬から宗谷岬へ	285pp/20cm	白山書房	1995	出版社寄贈
谷有二	オーロラに駆けるサムライ：開拓時代のアラスカを舞台に活躍した「犬嚮使いの神様」の生涯	276pp/20cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
近藤辰郎	コンタツおじさんのちょっといい山	139pp/25cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
田部井淳子	山の頂の向こうに	235pp/19cm	佼成出版社	1995	著者寄贈
日本山岳会秋田支部(編)	日台友好南湖大山・太平洋親善登山報告書1994：さあーイグドー	103pp/26cm	日本山岳会秋田支部	1994	編者寄贈
世田谷文学館 (編)	世田谷ゆかりの作家たち	160pp/26cm	世田谷文学館	1995	発行者寄贈
横田和雄	京都府の三角峰：全183座完登の譜	391pp/22cm	ナカニシヤ出版	1995	著者寄贈
田淵行男	山は魔術師：私の山岳写真	219pp/27cm	ブルーガイドセンター	1995	出版社寄贈
三和裕佑	とっておき北海道の山：道産子が案内する尾根・谷・スキー	214pp/19cm	東京新聞出版局	1995	出版社寄贈
日本山書の会・東海集(編)	山書好日	434pp/21cm	日本山書の会・東海集	1995	編者寄贈
アーネスト・サトウ	日本旅行日記・2 (東洋文庫 No.550)	334pp/18cm	平凡社	1992	田口二郎氏寄贈
Stephens, Rebecca	On Top of the World : The 1st British Woman to Climb Everest	196pp/25cm	Macmillan	1994	購入
Bartlett, Phil	The Undiscovered Country : The Reason We Climb	183pp/25cm	The Ernest Press	1993	購入
Hargreaves, Alison	A Hard Day's Summer : Six Classic North Faces Solo	158pp/25cm	Hodder & Stoughton	1994	購入
Secor, R. J.	Aconcagua : A Climbing Guide	138pp/22cm	The Mountaineers	1994	購入
Sherman, John	Stone Crusade : A Historical Guide to Bouldering in America	329pp/27cm	The AAC Press	1994	購入
Bathes, Rovers H.	The Love of Mountains is Best : Climbs & Travels from K2 to Kathmandu	493pp/27cm	Peter E. Randall	1994	購入
Ardito, Stefano	Peaks of Glory : Climbing the World's Highest Mountains	144pp/36cm	Swan Hill Press	1993	購入
Svoboda & Freedman	Ecology of a Polar Oasis	281pp/28cm	Captus Univ. P.	1994	購入
Toula, Tim N.	Rock'n Road : Rock Climbing Areas of North America	466pp/31cm	Chockstone Press	1995	購入
Hopkirk, Peter	On Secret Service East of Constantinople	431pp/25cm	John Murray	1994	購入
Darack, Ed	6194 Denali Solo	168pp/22cm	Ed Darack P.	1995	購入
Luebben, Craig	Knots for Climbers (How to Rock Climb Series)	39pp/23cm	Chockstone Press	1993	購入
Steffoff, Rebecca	Women of the World : Women Travelers & Explorers	151pp/29cm	Oxford Univ. Press	1992	購入
O'Connor, Bill	The Trekking Peaks of Nepal	224pp/24cm	Cloudcap	1991	購入
Prichard, Nancy	The Performance Guide for Climbers : I Hate to Train	58pp/23cm	Chockstone Press	1994	購入
C.E.G.	Medicina y Auxilio en Montana : X Jornadas de Medicina (Club Excursionista de Gracia)	321pp/21cm	C.E.G.	1994	S.G.I.M.寄贈
F.E.D.M.E.	Medicina de Montana : XI Jornadas de Medicina (Federacion Espanola de Deportes de Montana y Escalada)	359pp/25cm	F.E.D.M.E.	1994	S.G.I.M.寄贈

FRED BECKEY・著

MOUNT MCKINLEY

Icey Crown of North America

アラスカ、カナダ、アメリカ西部ノースカスケード山脈などの登攀活動および登山家としても著名なフレッド・ベッキーのまとめたマッキンリー峰の登山史である。

マッキンリーを取り巻く地理、地質、氷河期後の人類の出現などの歴史を含めた序論のあと、全二十三章からなる本論は三部構成になっている。

第一部は宣教師ハドソン・スタックらによる一九一三年の初登頂に至るアラスカ開拓時代の登山史。第二部は次の半世紀のバリエーション・ルートからの登頂、冬期の登攀、単独登攀などである。著者自身も参加した北西バットレスからの北峰の初登頂、ハンター峰の初登頂などの詳述がある。第三部は各ルートの概説、遭難の記録とその分析、一般的な案内などがまとめられている。

この山域を熟知した著者ならではの集大成であり、巻末には登山史年譜と文献リストがあり、インデックスも完備されていて便利。序文には著者らと一九五四年にハンター峰を初登攀したハインリッヒ・ハーラーによる回想文がよせられている。

The Mountaineers, Seattle, 1993.

三二〇ページ 二九・九五米ドル

(越田和男)

平野長靖・著

『尾瀬に死す』

昭和四十六年、尾瀬三平峠に迫る車道工事を阻止、その直後に遭難死した著者のことは、自然保護への関心の高まりとともに、今では教科書にも収録されている。

遺稿集『尾瀬に死す』は、彼の死を悼む友人たちによって、翌四十七年に新潮社から出版された。今回のものはそれに解説・写真を加えて文庫本として再出版されたもの。

長歳小屋三代目として生を受けた著者の、中学から高校・大学、そして新聞社時代を経て家業を継ぎ、尾瀬の危機に立ち向かって三十六歳で亡くなるまでの、折々の文章を集めている。純粋でひたむきな魂の軌跡は、歳月を超えていっそう読者の胸を打つことだろう。

二十二年前の出版の際の編者の一人である後藤允氏が解説を書き、その中で時代背景と「その後の尾瀬」についても詳しく述べている。

一九九五年一月 社会思想社現代教養文庫 六百八十円 (蜂谷 緑)

九十周年記念 フォーラムの計画

記念フォーラム委員会
委員長・大森弘一郎

九十周年行事の記念フォーラムの内容が、委員の方たちの努力で、だいぶ具体化してきました。いづれご案内がお手元に届くと思いますが、早めに予定しておいていただくために、現在の計画をお知らせします。

今回のフォーラムは①日本山岳会の百周年に向けての今後の活動の方向を世間に示し、同時に②会員がその内容を自覚して、③努力してもらう、というのが目的です。そのために、会員以外の一般の人々にも呼びかける(無料)ことも考えています。新聞、テレビ、山岳誌などでPRしますが、会員の皆さんもぜひ友人・知人をお誘いください。

十月十四日夜の記念式典の前に行う記念フォーラムの日程と内容は、以下のように計画しています。

①上高地フォーラム

十月八(十一)日、ヨセミテ協会のスティーブン・P・メドレー会長をお招きして、上高地の山岳研究所を基地にして自然保護問題の現地フォーラムを

行います。上高地、穂高、安曇野を会員とともに歩き、日本の山岳の環境をつぶさに見てもらい、そして夜は山岳研究所で、上高地を中心とした日本の山の自然保護の討議を行います。

フォーラムの参加定員は会員二十(二十五)名、希望者が多い場合は当委員会では選ばせていただきます。

②パネルディスカッション

十月十四日、新高輪プリンスホテル白雲の間(机と椅子の配置で定員二百五十(五百)名)で十時三十分(十二時三十分)、「ヨセミテからのメッセージ」と題して、メドレー会長を中心に、沼田真、岡島成行、小島有五さんとパネルディスカッションを行います。続いて会場を慶雲(丸く椅子を並べた設営)に移し、十五時まで質問を通しての懇談会。

③中高年者向き企画(内容は未定)

同じ十四日午前の時間、慶雲の間では、中高年登山者に喜んでもらえる内容の企画を行います。これは斎藤副会長を中心にした関西支部とその他の支部の方たちに、一切をお任せして検討していただいております。

④講演会

十三時三十分から十七時まで、白雲の間では、若手から中高年まで、すべての方に興味のある「日本山岳会の歩みと海外登山」と題する講演を行います。

す。ここではマナスル以降JACの四十年間のヒマラヤ登山の記録ビデオと、それらの隊に参加した隊員に体験談を話してもらおうと考えています。映像と人の組み合わせで、展開が面白くなるはず。

以上の企画で過去をまづ振り返り、さらに日本山岳会の百年に向けての将来像を考え、方向を探りたい、というのが目的です。

⑤パネル展示

このほか式典委員会では慶雲の間で、絵画の展覧、各委員会、同好会のパネル展示を計画しています。慶雲の間で、の車座になって行うフォーラムは、リラックスしたものになることを期待しています。

⑥予講集・記念品も

予講集、フォーラム参加者への記念品も計画しています。ご期待ください。

*

アメリカのヨセミテと日本の上高地は、地形といい、おかれている場所といい、類似点が多い一方、相違点も多いのです。日本より約四十年前先を走ったヨセミテでの成功と失敗の経験から語られる「ヨセミテからのメッセージ」は、我々の道標になると思っています。当日まで、さらに内容を煮詰めていきますが、基本的な骨組みは以上のとおりです。

会務報告

六月理事会

日時 六月八日(木) 十八時四十分～二十時

場所 日本山岳学会議室

【出席者】村木会長、中村、宮下、斎藤各副会長、大屋、吉永、中川、松浦、伊藤、水野、南井、溝口、田邊、宇田川各理事、石橋監事、神崎、小倉、村井各常任評議員

【委任】大谷、堀井、渡邊、山本、熊崎、大蔵各理事、川崎監事、重廣、大倉、大森各常任評議員

村木会長より挨拶の後、議事に入る。

審議事項

(一) 福島支部長交替の件

大屋 中島正夫→佐久間高男(会員番号四三〇一)を五月二十七日支部総会で承認。

(二) 名義後援要請の件

大屋 十月七日～八日に予定されている第三回日本山岳耐久レース「長谷川恒夫カップ」(奥多摩全山二十四時間レース)に対し、東京都山岳連盟会長より名義後援の要請があった。承認

(三) 『日本百名山』の深田久弥と山の文学展後援要請の件

九月二十九日～十月八日開催に当たり、名義後援と関係資料の借用、「山」に広報文の掲載を世田谷文学館より要請された。承認

(四) 九十周年記念ブロック別式典助成費用額の件

吉永

①一ブロック当たり助成限度額を四十万円とする。ただし申請額がこれより低額の場合は、その申請額を助成する。

②参加役員の費用支給は一ブロック三名までとし、交通費(支部長会議の支給旅費)、宿泊費(一泊分・五千円)とする。

③その他 (1)講演者などについては、各支部が旅費を支給する。(2)懇親会費、記念山行費などは自弁。(3)お祝い金などの手土産はなし。承認

(五) 創立九十周年記念事業委員会の件

大屋

平成六年十月理事会承認どおりであるが、通常総会を経て役員の交替に伴い一部加入変更を行う。

創立九十周年記念事業委員会

委員長 藤平正夫 副委員長 宮下

委員 齋藤惇生 中村純二 委員 小倉茂暉 大倉昌身 大森弘一郎

村井龍一 大屋悌二 吉永英明 中川武 大谷亮 参与 織内信彦 今

西壽雄 山田二郎 村木潤次郎 大塚博美

マカール登山隊一九九五実行委員会

藤平正夫 中村純二 小倉茂暉 村

井龍一 大倉昌身 重廣恒夫 橋本

清 伊丹紹泰 渡邊雄二 片岡泰彦

堀井昌子 山本宗彦 大谷亮 山本

篤 飯田肇

実行委員会

委員長 宮下秀樹 委員 小倉茂暉

大倉昌身 大森弘一郎 村井龍一

中川武 山口俊輔 南井英弘 大屋

悌二 吉永英明 大谷亮

財務委員会

大倉昌身 吉永英明 川崎巖 西村

政晃 橋本清

募金委員会

大屋悌二 小倉茂暉 飯野亨 石橋

正美 井野千枝子

式典委員会

大屋悌二 中川武 神崎忠男 堀嘉

余子 藤田礼子

記念フォーラム委員会

大森弘一郎 村井龍一 川合周 岡

島成行 藤井正彦 伊丹紹泰 宇田

川芳伸 大谷亮 坂本正智 熊崎和

宏 堀井昌子 松浦祥次郎 大蔵喜

百年史委員会

望月達夫 中島寛 織内信彦 松丸

秀夫 松田雄一 岩淵泰郎 鈴木敬

吾 山口俊輔 羽田栄治 近藤隆治

データバンク委員会

石田要久 鈴木敬吾 菅田紘八朗

合同募金委員会

藤平委員長以下二十五名は九四年五

月の理事会の承認どおり。委員は各

支部長に依頼しているが、本日まで

に宮城 柴崎、静岡 大石、宮崎 大

谷、山形 梅津、福島 佐久間支

部長と五支部長の交替があった。

事務局長 石橋正美 事務局 井野

千枝子

(六) 名簿作成の件

役員、各委員会委員名簿作成のため、

各理事より担当委員会委員名簿を六

末日までに届け出を受けて、七月の理

事会に提出したい。承認

(七) 山研運営委員会より

上高地地区のゴミ処理有料に伴い、

宿泊客の生ゴミの持ち帰りには問題

(途中廃棄など)もあり、一人一泊百

円の有料処理を提案する。承認

(八) マカール峰登山隊一九九五

●五月二十一日～二十二日にわたって

八名の初登頂に成功したネパール経由

隊員は六月十一日までに帰国、重廣隊

長以下六名は本日(八日)ラサ到着、

北京經由六月十三日成田に到着予定。

六月十一日、藤平総隊長、小倉、村

井実行委員が、中国登山協会を表敬訪

問のため訪中し、同行帰国する。承認

●支払いの件

六月五日、ネパールに対して二万三

千二百ドルを支払った。六月中に中国

自然保護随想

コロラドの山を訪ねて

白根まり子

昨年の夏、米国コロラド州のロッキーマウンテンの高峰、グレイス峰(四三五一メートル)とパイクス峰(四三〇一メートル)を訪れ、米国の自然環境の一部を私の目で見える機会を得た。

グレイス峰の横には、ほぼ同じ高さのトルーズ峰があり、三十分以内で登頂することができる。この二つの峰はアメリカ大陸を、太平洋と大西洋側に分ける分水嶺でもある。二つの峰とも、頂上は岩塊に覆われていて殺風景であるが、周辺の自然環境は、よく保たれている。なによりも南、北、西の三方に広がるロッキーマウンテンの峰々の連なり、その雄大な展望がすばらしい。

もう一つの峰、パイクス峰はコロラドスプリングスの西方約三〇キロメートルの位置にあり、現在は車や登山電車で頂上に達することができる。あとで知ったことであるが、今世紀の初め、本格的な環境科学の学術調査が初めてパイクス峰頂上で行われたという。ここで得られたデータを解析発展させることによって、人間が肺から酸素を摂取する生理の仕組みが、解明されたのだという。汚染されていない大気から十分な酸素を得ることは人類、さらには地球上の生物の生命の根本に関っている。私は、この環境問題の原点に係があったパイクス峰の、さして特徴のない芒洋とした頂上を思い起こして深い感銘を覚えた。

に対して七万八千ドルを支払う。承認

中川

●祝賀会の件
マカール東稜初登頂に成功した登山隊員、関係者を囲んで祝賀会を六月三十日十八時三十分より、池袋西口ホテル・メトロポリタンで開催する。承認

神崎

(九) 合同募金の件

石橋

●エベレスト(チョモランマ、サガルマータ)ウイメンズ・サミット一九九五(三月理事会で承認)が六月二十三日二十八日開催されるが、二十四日のシンポジウム(三カ国語同時通訳付き)の会場にまだ余席があるので、多数の参加を願いたい。

(一) 五月末日までの決算書の説明。
(二) 募金の現況(六月八日現在)
会員募金 延千三百二十六名
企業募金 千八百五万二千六百三円
八十四社(団体)
二百五万円

承認

●第四回国際交流青少年環境体験登山一九九五(二月理事会で承認)が一九九二年以来実施され、本年は第四回を中国の長白山(白頭山)で行うが、今後もJAC・日山協の運営参加の支援をよろしく願いたい。

(十) 海外登山隊名義使用許可

宇田川

●日本大学エベレスト登山隊登頂記念祝賀会を九段南の日本大学会館で六月二十六日開催する。招待状が届いたら参加のほどよろしく願います。神崎

(十一) 資料委員会より

溝口

(二) HATJに関連して
●エベレスト(チョモランマ、サガルマータ)ウイメンズ・サミット一九九五(三月理事会で承認)が六月二十三日二十八日開催されるが、二十四日のシンポジウム(三カ国語同時通訳付き)の会場にまだ余席があるので、多数の参加を願いたい。

日本山岳会青年部ムスタグ・アタ山群登山隊一九九五(登山期間は七月二十一日〜八月二十七日。青年部十名で実施)に対する名義後援を要請する。承認

(三) 集会委員会より
六月九日(金)〜十一日(日) 第十九回若葉会山行(越後・粟ヶ岳および守門岳)六月二十七日(火) 第十九回若葉会山行写真交換会 九月二日(土) ビールパーティー 九月三十日(土)〜十月一日(日) きのこ山行(博士山・高郷村温泉)十月十五日(日) 九十周年記念晩餐会後の親睦山行

【報告事項】

中川

(四) 九十周年式典委員会より
六月九日、六月二十一日、九十周年式典の打ち合わせ。

(一) 資料委員会より
① 監事の川崎巖会員経由で絵画の寄贈があった。② 四月に鳥取県伯耆国山岳博物館美術展に貸し出しの絵画二十点(三月理事会で承認)は、七月一日ルム着、返還となる予定。③ ウイメンズ・サミット関連の田部井淳子エベレスト登頂二十周年展出展の装備一式は、現在松本市立アルプス山岳館に預託中だが、六月〜九月末の予定で、田部井代表から貸し出しの要望(五月臨時理

事会で承認)どおり進行中。
(二) HATJに関連して
●エベレスト(チョモランマ、サガルマータ)ウイメンズ・サミット一九九五(三月理事会で承認)が六月二十三日二十八日開催されるが、二十四日のシンポジウム(三カ国語同時通訳付き)の会場にまだ余席があるので、多数の参加を願いたい。
●第四回国際交流青少年環境体験登山一九九五(二月理事会で承認)が一九九二年以来実施され、本年は第四回を中国の長白山(白頭山)で行うが、今後もJAC・日山協の運営参加の支援をよろしく願いたい。
●日本大学エベレスト登山隊登頂記念祝賀会を九段南の日本大学会館で六月二十六日開催する。招待状が届いたら参加のほどよろしく願います。神崎
(三) 集会委員会より
六月九日(金)〜十一日(日) 第十九回若葉会山行(越後・粟ヶ岳および守門岳)六月二十七日(火) 第十九回若葉会山行写真交換会 九月二日(土) ビールパーティー 九月三十日(土)〜十月一日(日) きのこ山行(博士山・高郷村温泉)十月十五日(日) 九十周年記念晩餐会後の親睦山行
(四) 九十周年式典委員会より
六月九日、六月二十一日、九十周年式典の打ち合わせ。

INFORMATION



◆九十周年記念親睦山行

集委員会

九十周年記念式典晩餐会の翌日、親睦山行を行います。

日時 十月十五日(日)

場所 丹沢表尾根三ノ塔(二二〇五メートル)

集合 三ノ塔 十一時三十分

コース①ヤビツ峠→二ノ塔→三ノ塔
②葛葉山荘→二ノ塔→三ノ塔
③葛葉川→三ノ塔(沢登り)
④水無林道→三ノ塔

会費 五百円(写真代)

申込 晩餐会返信用葉書にて。

*今回の山行は、現地集合・解散とします。詳細案内は記念晩餐会案内にて送付します。

◆「きのこ山行」ご案内②

集委員会

前号でお知らせした「きのこ山行」の行程および申込をご案内します。

日時 九月三十日(土)～十月一日(日)

交通 貸し切りバス

行程 九月二十九日(金)東京夜行発
三十日Aコース・博士山往復
Bコース・走行距離約六〇キロ

メートの自転車の自転車
ツーリング

*自転車は現地まで輸送可能な車種が原則です。下山後高郷村の温泉にて入浴、懇親の後、民宿泊。

一日 鏡山(一三三九メートル)往復

四時間

申込 二十九日のA、Bコース別を明

記の上、九月十日までに葉書で
集委員会宛お申し込みくださ
い。追って詳細を送ります。現
地参加可。(藤田、柳下)

◆伊吹山播隆祭のご案内

東海支部

東海支部では、槍ヶ岳初登頂で知られる播隆上人の遺徳を称え、伊吹山播隆祭を企画しました。

日時 十月二十一日(土)(上人忌日)～

二十二日(日)

場所 岐阜県揖斐郡春日村笹又君が代

公園および阿弥陀堂

行事 二十一日 春日村国見スキー場

ロッジ泊

二十二日 一心寺(上人開基の

寺)住職・安田成隆尼による仏
事、上人屋敷跡(カワト九〇五
メートル)へ登山 往復三時間

費用 一万円(宿泊、二十二日昼食)

申込 岐阜県安八郡神戸町落合一二四
一 稲葉省吾宛

締切 九月末日

◆94年度同期会

日時 十月七日(土)～八日(日)

場所 上高地山岳研究所

日程 七日十六時・山研集合

当日は手作りの懇親会(持ち込
み歓迎) 八日は各自山行

費用 六千円

申込 葉書に「第二回94同期会申込」と表記。会員番号、住所、氏名、TEL・FAX番号を記し、九月二十日までに、日本山岳会事務局94同期会宛郵送で。先着三十名に詳細を通知します。

問合せ 原山恵津子

TEL〇四二四一七五〇三六三
FAX〇四二四一七二八五六二

◆「日本百名山の深田久弥と山の文学」展

世田谷文学館主催・日本山岳会後援

深田久弥自筆の原稿、著書、創作メ
モ、書簡、愛用の登山用具など二百余
点が展示されます。

日時 九月二日(土)～十月八日(日) 十時

～十八時 毎週月曜日休館

場所 世田谷文学館(世田谷区南烏山

一〇一〇一〇)

TEL〇三三五三七四九一一

観覧料 一般三百円(二百四十円)

大高生二百円(百八十円)
小中学生百円(八十円) カッコ
内は二十名以上の団体料金

関連イベント 山岳映画上映会・九月九日(土)

◆「木下(きおろし)貝化石層」

現地見学会のお知らせ 二火会

日時 九月九日(土) JR成田線木下駅

午前十時現地集合(JR上野駅

11番線八時五十六分発成田行快

速直行が便利)

講師 神戸信和氏

*昼食は各自持参 詳細はルームまで

◆集会スキー懇親会は安達太良山

西麓の沼尻温泉で……

集委員会

例年八方尾根で開催している集委
員会主催のスキー合宿を来年は田部井
淳子会員の沼尻高原ロッジで行います。
温泉に浸かり、グレンデと山スキーを
楽しみましょう。

日時 平成八年一月十三日(土)～十五日

(月)

*先着五十名まで。詳細は「山」十一

月号でお知らせします。

◆エーデルワイスの世界展

岩手県大迫町立山岳博物館(Tel〇一

九八・四八・三〇二〇)で開催中です。
九月二十四日まで展示していますので、
どうぞご覧ください。

創立90周年記念事業募金応募状況

(1995年7月5日現在)

累計/1,410名/3,820口/19,099,603円

- 40口 (200,000円)
羽田英彦 (計48口)
- 10口 (50,000円)
小林太刀夫 明学山岳会 橋本正 橋本龍太郎 (計30口)
- 6口 (30,000円)
広谷光一郎 森川洋祐 木下是雄 (計10口)
- 4口 (20,000円)
内山脩一 菅田紘八朗 (計6口)
- 3.6口 (18,000円)
川越昭夫
- 3口 (15,000円)
出口一良
- 2口 (10,000円)
赤井一隆 磯野剛太 青木枝朗 車昭保 川田邦夫 吉川謙三 轡田隆史 宮田賢二 小柳清治 小林義明 河野正純 関根福蔵 堤甚五郎 藤井哲夫 阿部慎二
- (計4口) 長岡伸恭 渡辺竜吉 小島一喜 都竹祥子 成田三左雄 中村太郎 平林芳夫 中嶋啓 廣瀬学 北原正宣 (計4口) 長坂洋一 井上隆夫 守山進太郎 風間明子 柳田凉子 関清 貝森健治 加藤良三 飯田肇 高柳清美 松本睦男 佐野源一 横田春雄 小枝守志 久保田保雄 鮎川澁 福田泰文 足達敏則 増子寛 奥村一郎 (計4口) 賀嶋増造 鈴木要三 渡辺洋子 嶋原義昭 村上慶三 石塚寿昭 山内敏亘 渡辺博厚 加藤節子 (計4口) 笹島孝子 松本良 和田晴光 秋月良三
- 1.8口 (9,000円)
小松良三
- 1口 (5,000円)
金成忠 宮川清明 宮川ふみ江
- 日本伸 山本誠治 白川真一 星野幸太郎 坂井厚 小澤みち子 斉藤喜一 遠藤京子 菊田貞明 藻谷拓 村上哲 河西俊郎 森本市郎 菅靖夫 (計3口) 須賀紀子 徳島和男 高橋眞雄 内海幸男 北林嘉鶴子 (計3口) 内田昌子 大川清二 大槻雅弘 坂本美弥 杉山雄幸 山口武夫 有馬純 (計3口) 佐藤一良 小野季子 小林登志夫 岡部正敏 山崎健 島田一史 青木督平
- 0.6口 (3,000円)
木村友弥 松原尚之 (計2.6口)
- 0.4口 (2,000円)
高田昭則
- 0.2口 (1,000円)
猪又敦子 東喜洋

30日	29日	28日	27日	26日	22日	21日	20日	19日	16日	15日	14日	13日	12日	8日	7日	6日	2日	1日	6月
科学委員会	研	94同期会	青年部	集委員会	資料委員会	集委員会	記念式典委員会	集委員会	学生部	学生部	山の自然学研	学生部	山の自然学研	学生部	山の自然学研	学生部	山の自然学研	学生部	山の自然学研
6月来室者685名																			

ルーム日誌

■会員異動

物故
谷口治郎 (九六九四) 7・5・28
高尾徳繁 (四五四二) 7・6・2
山口健児 (一一七一) 7・7・1

■終身会員

河村 清 (八六五二) 7・6・22

■訂正

岸 栄 (六五〇六)

訂正 六月号四ページ下段二八行目「標高差五五メートル」を「五五〇メートル」に、一〇ページの新人会員・恒川洋の勤務先「恒川消火器クリニック」を「消化器」に訂正します。

■編集室からのお願い

会報原稿の送付は事務局でなく、必ず左記宛にお願いします。事務局宛ですと、その分遅れます。

〒二七七 柏市豊四季六四六一一五七
TEL・FAX ○四七一七四一一〇三
伊藤 敏 敬宛

日本山岳会会報 山 603号

1995年(平成7年)8月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京 (03)3261-4433
振替口座 東京3-4829
発行者 村木潤次郎
編集人 伊藤 敏
印刷 株式会社 双陽社